
魔法少女リリカルなのは 革新者と魔法少女

ニコラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 革新者と魔法少女

【Zコード】

Z2223BA

【作者名】

ニコラス

【あらすじ】

ELISとの対話から50年の月日が流れ、刹那は異世界で変革を促す！これはただパターンを変えた『再生の天使』とお考えください

プロローグ

ELSとの対話から50年が過ぎようとしていた
対話を成功させた人類初の『純粹種のイノベイター』でその身と愛
機にELSの一部を融合させた『ダブルオーケンタ』のガンダム
マイスター『刹那・F・セイエイ』は愛機を駆り、外宇宙を航行し
ていた

そんなある日、ヴェーダ（ティエリア）からの情報で今刹那のいる
宙域で謎のエネルギーを感じたという情報が届いた
その調査を受けた刹那は、その宙域を隈なく調査した

「…センサーに異常はない」

いくら調査をしても何も発見できない

「だが、ヴェーダの情報が間違えているなんて」とは…」

それはありえなかつた

ヴェーダが提示してくる情報には必ず何がある。刹那はそう思つた
すると、今まで何も反応しなかつたセンサーがいきなり反応した

「なつ！あれは…！」

視線の先には黒く渦上になつてゐる空間がある
しかも、その空間はあたりのデブリを粉々にして吸い込んでいた
ELSの時も木製近辺の星を吸い込んでいた

「つ…機体が…」

クアンタが吸い込まれていたのだ

操縦レバーを動かしてもクアンタは反応せず、ただ流れていくだけ

そして機体ごと刹那は吸い込まれてしまい、目の前が真っ暗になってしまった

魔法の世界

「うう……これは？」

目を覚ますと、刹那は白い天井を見上げていた
わずかに臭つてくる消毒液の臭い

これだけで大体の人間はここが病院だということを理解するだろう
(たしか俺は……黒い何かに吸い込まれて……しかし、クアンタはどう
こだ?)

「あつ！ 気がつきましたか！？」

ナースであろう人が刹那がいる病室に入ってきた

「高町さん！ 彼が目を覚ましたよ！？」

すると、片方でポニーテールにしている栗色の髪の女性が入ってきた

「よかつた！ 大丈夫ですか？」

「アンタは……？」

「私は時空管理局教導官高町なのはです」

(時空管理局？ 連邦は新たな部隊でも作つたというのか？)

聞き慣れない言葉に刹那は連邦の一部と考えた

「俺は…エヘン…いる。」

とりあえず聞いてみる

「あなたは次元震があつた地点で倒れていたんです。小規模だつたからよかつたけど…」

「？次元震とはなんだ？それに時空管理局？それは連邦の一部か？」

「ふえ？」

刹那は聞き慣れない言葉が出てくるので、この際に一片に聞こいつとした結果、彼女は驚いた表情を浮かべ間抜けな声を上げた

それを見た刹那は何故？といった表情で見る

「それには地球なのか？」

「ううん。ヒューマン・チルダですよ。ひょっとしてあなたは地球出身ですか？」

また聞いたことがない単語が出てきた

しかし彼女の言い方はこには地球ではなく別の場所だと言つている
感じだ

つまりは異世界

とにかく刹那は彼女の質問に答える

「やうだ。俺は中東出身だ。名前からしてお前は日本出身か？」

「はいそうですが…、ひとつ聞いていいですか？」

なのはの表情が真剣になる

「本当に管理局を知らないんですか？」

「俺が知っているのは地球連邦だ。それ以外の軍は知らない。時空管理局というのは一体どんな組織なんだ？」

「簡単に言うと次元世界を管理などをしている組織です」

刹那は管理という言葉に強く反応した。過去にもアロウズの虐殺行為で連邦がこういった形で世界を管理、統括していた
だから刹那には管理局が良いものに思えなかつた

「…あなたは本当に管理局を知らないんですか？」

「ああ。それに話を聞く限り、ここは俺が知らない場所のようだな」

そして刹那は静かに目を閉じて何かを考える

そして刹那は何かを思い出したのか、目をハッと開けてなのはに聞く

「高町なのは、俺を見つけたとき、一緒にMSがなかつたか？」

「?モビルスーシってなんですか?」

「（そうか…。ここは異世界だ。ガンダムを知る訳がないか…）俺
が乗つっていたものなんだが…」

「いえ、あなたはその場に倒れていきましたよ？」

「なつ…?（ならクアンタはどこに…?）」

「でも、あなたのすぐ近くにこれが落ちていきました」

なのはは懐から何かを出して刹那に見せる

「青い…宝石?」

「これはあなたのじゃないんですか?」

「わからない。少なくともこっちに来るときには持つてはいなかつた」

刹那は首を横に振つてわからない」とを示す
だが、刹那はその宝石に惹かれる何かを感じていた
懐かしく、まるで自分のもので、いつも一緒にいた感じ

「…『クアンタ』?」

ふいにそう呟いた

そしてその言葉に反応するかのように、宝石がなのはの手から離れて浮いた

「な、なに!?」

なのはは何がなんだかわからない

だが、刹那には確信があった。これは自分の『ガンダム』であろうと
頭にあるひとつずつ単語が流れてきた
体を起こして、ベッドから出て立ち上がり、宝石に手を差し伸べて、
その言葉を口にする

『セシリアップ』…「

刹那の体が青白い粒子に包まれていき、部屋を粒子『GN粒子』で埋め尽くしていく
なのはは手を口を隠して、口をギュウッと瞑る

なのはは手を田を隠して、目をギュッと瞑る
そして光が収まるど、刹那の服装が変わつて

そして光が收まる
と糸那の服装が変わっていました

青と白のスマートな装甲、右手についた緑色の刃の折り畳まれた実体剣、腰こついた大小一本の剣、背中の「リ」字のパーソンから放出

さて その姿はかつての彼が乗つて いた 愛機
で いる 淡い 青白い 粒子

「『エクシア』？」

なのはがこちらを見て間抜けな声を発する

彼女は戸食を付して姿が変わった刹那を見上げていた

（おひさま！マスター！）

刹那の頭にフェルトにも似た子供のような声が響く
とりあえずその者の名を刹那は口にする

「クアンタか？」

「（そうだよ～！マスターのガンダム『ダブルオーケアンタ』なの
だ～！）」

「とりあえず、少し静かにしてくれ。頭が痛い」

「（ふ〜〜マスターとの久しぶりの対面だったのに〜〜）

「だ、誰と喋つてゐの?」

「?クアンタだが…」

なのはから見たら刹那が一人でしゃべつてゐるよひにしか見えなかつた

「クアンタつて、そのデバイスなの?」

「デバイス?」

「（マスター、それは僕のことだよ。とにかく一回元に戻るね?）

「ああ」

そして刹那の体が一瞬光つて、元の患者が着る服に変わる
だが、隣には知らない少女が立つていた

青白い腰まで伸びた髪に青と白のドレスのよつた服、エメラルドの
ような色をした瞳

背は刹那の肩ぐらいだろうか?

「だ、誰?」

「僕?僕はマスターのデバイスの『クアンタ』なのだ〜!〜

笑顔で元気に答えるクアンタのテンションに二人はついていけない

「ていうか、あなたはデバイスなの!〜?」

「せうだよ～。この世界で言つたりインテリジョンとテバイスだけ
ど、ちよつと変わつてゐんだよね～」

「せうなんだ～」

『でも、本当に珍しいですね。擬人化ができるインテリジョンとテ
バイスとは』

「今のは？」

「私のデバイス『レイジングハート』だよ」

『よりしへ』

「あ、ああ。だが、高町なのは『れはなんなんだ？』

「…『魔法』をあなたは信じますか？」

「…『魔法』…？」

あの御伽噺にててくる魔法か？だが、さつきやつたあれとは違つ
がする…

でも、さつき自分がもう立証してしまつた

信じるしかないな…

「私たちは魔法を使って戦つたです。さつきあなたがなつたような
姿になつて」

「…せうか…」

「あつー。そろそろ行かなくちゃ。あと、お医者さんからあと数日は安静とのことなのでー。」

「ああ。わかつた」

「またねー！」

「そういえば、あなたの名前は？」

なのはは名乗つたが、刹那はここまで明らかにしていなかつた

「俺の名前は刹那・F・セイエイだ。敬語はいらない」

「うん！ またね！ 刹那君！」

そう言つてなのはは病室を出でていった
クアンタは手を振つて見送つた。刹那は再びベッドに入つて眠りについた

一日が経ち、刹那は退院することができた
怪我といつたものではないし、それにイノベイターとしての彼の体
がより回復を早くさせたのだ

クアンタは現在は待機状態に戻つてもらい、刹那の首にペンダント
としてかかつていた

なのはが迎えにきて、刹那に会わせておきたい人たちがいるからと
彼女の親友の実家まで連れて行かれた

そしてなのはがその人の家のインター ホンを鳴らす
出てきたのは長い金髪に赤い瞳の女性だつた

「あ、なのはいらっしゃい。…あなたは？」

「刹那・F・セイエイだ。敬語は慣れてないからいらない」

「そう。私はフェイト・テスター・ハラオウンだよ。よろしくね、刹那」

フェイトと刹那が握手をする

その時にフェイトの顔が少し赤らんだのは氣のせいだらう

「早速お邪魔していいかな？」

「あつうん。どうぞ二人とも」

「お邪魔しまーす！」

なのはは普通に入つていった

だが、刹那はこの家の奥から何かを感じて警戒しながら入る
幸い靴を脱いで家に上るるといつのは過去に経験しているので簡単
だつた

リビングに出るとそこにはなのはとフェイト以外の女性が3人と男
性一人がいた

そして銀色の髪の妖精みたいなのが一体、青い毛の狼が一匹がいた

「その人がなのはちゃんの言つてた次元漂流者かいな？」

「うん。そうだよ」

「刹那・F・セイエイだ。敬語はいらない。よろしく頼む」

「つむはハ神はやてといいます。じつむはラインフォース?といいます」

「ラインフォース?ですぅ!」

「次はあたしだな。ヴィータだ。言っておくが、お前より小さいでな、年は私の方が上なんだからな!」

刹那はイノベイターだから人の何倍もの寿命があるからそれなりに長生きはしているが、外見は22歳のままだが、ヴィータはそれよりも長く生きている。刹那には謎で仕方がなかつた

「ああ。よろしく頼む」

「次は僕かな?クロノ・ハラオウンだ。次元航行艦の艦長を務めている。あと、フェイトの義兄もある。宜しく頼む」

「刹那・F・セイエイだ」

見た感じ一人はうまくやつていけそうだ

二人は握手をする。お互いを睨み合うかのように握手を終えて、刹那は青い毛の狼に目をやる

「…お前は喋れるんじゃない?」

「つ…よくわかつたな」

「そんな感じがしたからな。魔法はそう言つたこともできるんだろう?」

「フツ…なかなか見どころがあるな。私は守護獣のザフィーラだ」

「ああ」

E-L-Sの「」もあるので剎那は特に驚くといったことはない
そして「」に集まつたのは他でもない。剎那のこれからをどうある
かだ

「それで、剎那君はこれからどうするんや？ なのはちゃんかうは！」
「バスを使つた聞いたんやけど…」

「ああ。リンカー」「アもある。ランクはA A A + らしいが…」

「驚いたよ。いきなりなんだもん」

たしかにあの時はいきなり発動したから、なのはは焦つていた
よく周りが騒がなかつたものだと剎那は思つていた
クアンタに聞いてみたら、その時は周りに誰もいなかつたからだそ
うだ

「でも、魔法の使い方は知らないんやろ？」

「うん。教えてないもん」

（だが、エクシアならモベルースーと回り回りでわかるはずだ）

剎那はそう考えた

「マスター、そろそろいい？窮屈で疲れたよ~」

「あ、ああ。構わないが……」

そして刹那の胸元にある宝石が光つて、クアンタが人の形で出てくる刹那となのは以外のメンバーが目を見開いて少女の姿となつたクアンタを見ている

「あれ? なのはさん、みんなどうしちゃったの?」

「いやせせ…。多分クアンタちゃんだと感ひぬ?」

「 い もん で ？」

いきなり猫語を使ってクアンタは可愛らしさをアピールしだす
約一名、目が血走っている

「か
」

その一名が手をわきわきさせながら、立ち上がる
その目はもう人ではない

「——シヤー！」

「何つ!?

その一名、はやてが刹那ですら反応できないスピードでクアンタを拉致る

クアンタは猫語の悲鳴を上げて連れて行かれた

「なにこのト…? めっちゃカワ…」

頬ずりするはやてにクアンタはなすすべなくそれを受け入れるしかない

「…やめろ…」

「キヤアアアアアッ…!」

クアンタが言つてもそれは逆にはやての変態心に油を注いでしまつ必死に抵抗するクアンタだが、はやての力には敵わない

「…やめ…」

「もつ食べやいたいわ…!」

「…や…マスター…!」

刹那に応援を求める

「…ハア…お前が戻ればいいだろ…」

「あつ。 そうだね」

そしてクアンタは再び刹那の首に宝石となつて戻り、はやてから逃げる

「あつ！ クアンタちゃんは…?」

「はやて、いい加減にその癖やめろよ…」

「これが私や！！」

「威張る」と「じかんなこと思ひみへ」。

「そりだよはやてちやん…。それに今は刹那君のことでしょ?」

「ハッ！そりやつた！」

「忘れてたの！？」

うん！

そして再び話し合いか行われる

—では、なのは、刹那の元バイスの種類は?』

「クアンタちゃんが言うにはインテリジェントバイスらしいよ？でも、調べよつとしたら全部エラーが出ちゃつて…」

「アリス、何なんだ？」

「未知の技術が使われているのか…それともデバイス本体がそれを
拒んでいるのか…」

「どうなんだ? クアンタ」

『後者だよー！だって僕の中あまり見られたくないんだもん！』

と、クアンタの理由は子供みたいなものだったが、刹那はそれを自分なりに納得させた。

この姿でもガンダムだ。つまりなかには戦争の引き金になるものが詰まっている

クアンタはそれを守りうとしたのだろう、と刹那はその考えで納得した

「なら、デバイスの件は置いといて、刹那君はビリするん？・管理局に入るんか？」

「たしかにデバイスを無断で所持するのは禁止だもんね」

「どうするんだ？刹那・F・セイエイ

（管理局には絶対何かある。仮に入つたとしてもおそらく俺は利用されて終わるのは間違いない。それにクアンタを管理局に利用されてしまつたら戦争が起きかねない。しかし、かといって一人ではどうすることもできない。くそつ！どうすればいいんだ！？）

刹那は頭を悩ませる。それに刹那は軍というものにはいい印象を持つていてない

「（マスターはマスターの考え方で動いてよ）

（クアンタ？）

「（僕はマスターと戦つてマスターと死ぬ。それが四機のあつたガ

ンダムの「ひの一機の僕の目標みたいなもの」

(…)

「（管理局は至るところのは僕も感じてる。だからこそ、中から変革させて変えよつよ~。）」

（…ああ。俺が迷つていても何も始まらない。それに俺には戦いしかない。なら俺は俺のやり方で管理局を変える！お前と共に…！）

心の中でクアンタと共に決意を新たにする刹那

「どうするの？刹那…」

「…俺は管理局には入らない」

「…理由は？」

「俺は正直言つて管理局といつものを感じることができない。俺の世界でも軍はあつたが、上層部が腐りきついていた。おそらく管理局の上層部もやうだらう？クロノ」

「…ああ。僕も伊達に何年も管理局に所属はしていない。嫌でもそういうこつた物事は耳にも入つてくる」

「だから、俺は管理局には入らない」

「そつか…」「だが…えつ？」

「お前たちなら信じることができる。だから俺はお前た

ちに協力する

刹那の一言に全員驚いた表情で刹那を見る

「俺はここにいる者たちに協力をする。そして管理局を変える」

刹那の目には決意の光が宿っていた

その赤い瞳を輝かせ、刹那は全員を見る

その瞳になのはとフェイドは顔を赤くしているのは気のせいではないだろう

そしてクロノが微笑み、立ち上がる

「いいだろう。だが、その前に君の実力が知りたい」

「…どうすればいい?」

「俺と模擬戦をしてもらおう

どうかな～？

クロノが模擬戦を申し込んできたため、今一人はクロノが艦長を務める次元航行艦の訓練室にいた
他のメンバーは一人の模擬戦の見学
すでにクロノの手には白い杖が握られて、あとはクロノ自身が立ち直れば始められる状態だ

対して刹那はこの世界に来たときに何故か着ていたソレスター・ビングの制服だった
首には待機状態のクアンタがある

「そろそろ始めるか……？」

「ああ」

「（それじゃ）、行つてみよー！」

「クアンタ、セットアップ！…」

青白い粒子が刹那を包み込み、粒子が消えると青と白のスマートな装甲を身に付けた刹那がいた

背中の「ーン状のバーツからは順調にGN粒子が放出されてくる

「それが君のデバイスか？」

「ああそうだ。これが俺のガンダム『ガンダムエクシア』だ…！」

そして右手に『GNソード改』、左手に『GNシールド』が装備されて、エクシアの本来の姿となる

両者は構えて、そして沈黙

見ているなのはたちにとつては短いよつては長く感じた
そして、

「ハアアツー！」

刹那がGNソード改をライフルモードでビームを放ち、戦闘は始まつた

地面擦れ擦れを飛行しながら放つたピンク色の閃光が至る方向からクロノに向かつて飛んでいく

「IJの程度つー！」

その射撃はあまりにも正確だつた

クロノはそれを空中に飛んで避けた
それを読んでいた刹那は瞬時にソードモードに切り替えて足に力を込める

「（クアンタ！飛行制御を頼むー）」

「（りょーかいにやによだーー）」

クアンタの言葉のおかしさに刹那は疑問を覚えずにはいられなかつた
だが、すぐに切り替えて、刹那はGN粒子を吹かせてクロノに向かつて飛びかかる

「IJには、俺の距離だ！」

「何つーー？」

身を翻すが、すでに刹那はGNソード改を振り上げていた
そしてGNソード改を右上から振り下ろす

「ぐつ！」

クロノはそれを体に当たる直前に障壁で防御する

「今のはさすがにヒヤッとしたぞ…。まるで読んでいたような動き
だつたな」

「クアンタのサポートがあつてこそだ」

「（えへへ…）」

そして一寸離れる一人

両者の表情には笑みが浮かべられていた
そして両者は再び動き出す

「でやああああつーー！」

GN粒子を放出して刹那は再びクロノに切り掛る

『ステインガーレイ』

射速に優れた砲撃魔法で刹那を迎撃するクロノ
その魔法は刹那に向かっていき、爆発が起きた

「これで…！」

だが、クロノの予想は裏切られてしまう

「なつ！？」

左手のGNシールドを無くした刹那が、両手にピンク色の刃のビームサーベルを持ちクロノに突進する

GNシールドで砲撃を防いで、ビームサーベルを瞬時に抜いたのだ

「これが俺の！」

「くつ…」

「ガンダムだ…！」

反動で動けないクロノをすれ違いざまに十字に切り裂く…もちろん非殺傷設定である

「まさか魔導師になつて間もない素人に負けるなんて…君は一体前の世界で何をしてたんだい？」

「…俺には戦うことしかできない。だから戦い続けた。今はこれしか言えない」

「そうか…」

それを聞いたクロノの表情が暗くなる

観戦しているなのはたちには刹那が言つたことは聞こえていない

「すい…。お兄ちゃん」勝つやつた

「シグナムが…」いなくて正解だったな…」

「「」やはは、同感なの…」

「刹那さん、かつこよかつたですうー。」

「それにしても刹那君もやりおるな。あのクロノ提督には無傷やで？」

と、刹那とクロノの戦いについての感想を述べるのはたち

部屋が変わつてそこにはクロノたちがいる

「それでクロノ君、刹那君はどうなるの？」

たしかに模擬戦でのクロノに勝つたのだから、管理局としてはこのまま見逃すわけにもいかない
かと言つて入隊はしない刹那なのだから、どうしようもない

「刹那・F・セイエイ、君に一つ頼みたいことがある」

「?なんだ?」

「今度、試験運用として新設される部隊『機動六課』に民間協力者として協力してくれないか?」

「えつー!? クロノ君ー!?」

「お兄ちやんー!?」

「クロノ君ー!?」

「…理由を聞かせてくれないか?」

「君には実力がある。それに管理局としてもその力を野放しにするわけにはいかないのは分かっているな?」

「…ああ」

「その力で今から半年後にはやてが部隊長となる部隊に協力して欲しいんだ」

「八神はやてが?」

刹那は驚きの表情ではやての方を見る

当の本人は刹那に苦笑いをしながら手を振っている

クアンタも待機状態で顔は見えないが、驚きの表情を浮かべていた

「彼女たちもその部隊に所属する。どうだい?」

「……わかった。協力しよう」

「いいんか? 刹那君は管理局を信じてないんやね?」

「さつきも言つたが、こいつらは信じることができる。そう感じるんだ…」

全員安堵の表情を浮かべる

これで刹那は半年後に新設される部隊『機動六課』への協力者となつた

「でもよ～あと半年どうすんだだよ? 私たちせきじゅうじつこのいと見てられないぞ?」

「… なら、なのはなちゃんヒロイットちゃんに刹那君の教導をお願い
でもひんやうか?」

「うん。私は別に構わないけど、フュイトちやんは？」

「私はそんなに暇がないからなのはに任せせるよ」

「あ、アハ、イントロゼンは刹那君と一緒にいたくないんか?」

フェイトが顔を赤くしてはやてに食いつく。それをなのはたちは笑いながら見ていた

「おい、刹那」

「どうした？ クロノ」

「フヒイト」手を出すなよ。」

ここでシスコンが本領を発揮。何を言っているのか理解ができない
刹那

「お、おこにいちゃん！？」

「クロノ君がシステムと化した！？」

そこからクロノの暴走が始まり、フロイトははやてにからかわれながらクロノの暴走を止める

そしてフロイトの一言でクロノの暴走は沈静化した（その一言は読者に任せると）

刹那はクロノの変わりゆきを田を丸くしてみていた
クロノはフロイトの一言により暗くなってしまった
クアンタは待機状態でクロノのことを笑っていた

「マスター、これが『アビ』に住むによ？」

クアンタが擬人化して刹那の隣に立つ

まだ言語が可愛らしくなっている。クアンタの中でブームなのか？
刹那がこの言葉には疑問しか生まれなかつた

「たしかに君は管理団員と云わけじゃないしな……」

「どうすんだよ？ はやて」

「つねは部屋余つてないで？ 家族が多いしな」

「お兄ちゃん、私たちの家は？」

「いや、あまり余つていないと思つや～」

「なのはちやんの家はどいや？ 刹那君なら襲つてしもなこやね？」

なのはと顔を真っ赤にして手をバタバタして慌てる。フェイトも顔を赤くして刹那をチラチラ見ていた
一体何をやつているんだ?と思う刹那
だが、刹那にはもうひとつ気になることがあった

「それからリインフオース?、なぜ俺の頭の上にいる?」

「えへへ、刹那さんの髪の毛は気持ちがいいですう」

リインが刹那のウェーブがかつた髪に寝つ転がっていた。とても気持ちよさそうにだ

別は娘が育てている様子はないが、頭は達和感があるようだ
はやての田はとても優しくリインを見つめていた

「俺は別に野宿で構わないんだが」

「…それはダメ（だよ）…」

なのはとフヨイトがすごい剣幕で刹那に迫る

「ひやー？」

リインも一人がいきなり迫つてきたことに驚いてしまった
頭から落ちそうになり、なんとかこらえた

「これから協力してくれる人に野宿なんてさせられないの！」

「そりだよーそれに刹那はこの世界に来てまだ口が浅いんだからー。」

と二人が言つてくるが、刹那はあまり迷惑をかけたくはなかったが、刹那は今起きている現状をどうにかせねばと思つた

「……近いんだが…？」

「「「」」」

そして二人は慌てて刹那から顔を赤くして離れた
もう何がなんだかわからない刹那。リインも自分を落ち着かせようと深呼吸をしている

他のメンバーは二人の行動に驚いていた

「ハア～…とにかく俺は高町なのはと行動を共にすればいいんだな
？」

「ああ。魔法戦に關しても彼女に聞いてくれればいい

「これからよろしくね！刹那君！」

「私も時間があれば時々教えられることがあれば教えるから

「ああ。宜しく頼む。高町なのは、フュイト・T・ハラオウン」

「私の」とはなのはつて呼んでーそれじゃあ他人みたいで落ち着かないのー！」

「私もフェイトでいいよ。私だけ呼び捨てなのもあれだから

「…わかった。なのは、フロイト

「よろしくねや こよ～！～

そして刹那の半年間の魔法訓練がスタートした

模擬戦と協力（後書き）

UVERworldの新曲、今さらだけどいいね！！

グダグダだったな……………もひいいわ！！

といつても訓練という訓練はしていない

AINHARDTは可愛い。もう一度言ひ。AINHARDTは可愛い！

大事なことだから一回書つたが

あの後、なのはの家に泊まることになった刹那。地球上に家族がいるそうだが、管理局に所属しているためミッドチルダで暮らしているそうだ。長期の休暇が取れたら時々帰っていることだ。そして今、刹那とのはとクアンタは今後についてのことを話し合っていた。

当然なのはは教導の仕事もある。それゆえにずっと刹那の訓練を見ていたられるわけではない。

「で、なのは、なぜそこで着替えている?」

「ふえ?」

刹那の目の前で堂々と着替えをするなのは、いくらかうつった感情に疎い刹那でもそういうのはだめだ。目を逸らして家の中を見渡す刹那。

「『元気』ははは。今度から『気』を付けるね」

「頼む。このままだと俺が危なくなる」

やつぱりいつかはと着替えを済ませるなのは

「でも、なのはさんは美人だにゃ。それに体つきもとても軍人とは思えないにゃ!」

「クスッ、クアンタちゃんも美人だと思つよ~それに私よりフェイ

トちゃんの方がすごいんだから

目をキラキラさせてなのはを羨ましそうな瞳で見るクアンタ
だが、クアンタも外見からすれば16歳ぐらいで、体つきもなのは
以上フェイト未満な体だ
まあ胸はなのはよりは大きいがね…

「それで、今田から訓練をするのか？」

「うん。あんまり教えられる機会もないから。でも刹那君も模擬戦
をしたばかりだからあまり無理はさせないからね？」

「そこについては問題はない。体力については人一倍はあるつもり
だ」

「へえ～そういうえば刹那君は前の世界で何をしていたの？」

刹那の顔に翳りが差す

「あっ、ごめんね。聞かない方がよかつたかな？」

それを察したなのはが謝る

「…いや、ただ今話すようなことじゃないだけだ。時が来たらいざ
れ話す」

「…うん。絶対教えてね？約束だよ？」

「ああ。話が逸れたな。それでどこで訓練をするんだ？」

「あつうん。訓練室を使つ許可もとつてあるから、少し外で待つてくれるかな？」

「了解。行くぞクアンタ」

「はいにゅう のだ！」

そして刹那とクアンタは外に出てなのはことを待つ

刹那は外で待つてゐる間にクアンタと会話をしていた

「クアンタ、他のガンダムの武装はあるか？」

「マスターが乗つた機体の武装だけにま

「やうか…。ダブルオーの状況は？」

「まだまだにせ。じめんにゅうマスター…」

「いや、お前が謝る」「じやない。それに今はエクシアだけで事足りる

「マスター…」

「それに俺とお前なら負けないことを」

「…うん…！」

そして暗かつたクアンタの表情が明るくなつた

それを見た刹那は自然と表情がゆるくなつたのを感じた

「お待たせ…何を話してたの？」

「これは僕とマスターの一人だけの秘密にゃーーー！」

「ええー！教えてよー！」

（というより、秘密にするようなことなのか？）

なのはとクアンタを見ながら密かにそう思った刹那であつた
たしかに秘密にするような内容は会話の中には入つていなかつたはず
でも、そこはクアンタのあれだうねり ゆ作者

「とりあえず訓練室に行こーや。フェイトちゃんも来るみたい」

「フェイトも？」

「えつー？フェイトさんも来るのー？」

「うん。だから行こー！」

「うんー。」

「ああ」

そして三人は訓練室に向かつた

三人が来た場所は特に何もない普通の部屋だった
だが、広さは結構広かつた

「あつ！ フェイトちゃん！」

「なのは」

そこには黒い杖を持ったフェイト・T・ハラオウンの姿があった
さつき見た服と髪のまとめ方が違つことを見て刹那はあれがフェイ
トのバリアジャケットなのだろうとを考えた

「フェイトちゃん、どうしてバリアジャケットなの？」

なのはも気になつたのだろう

「うん。クロノとの模擬戦を見てたら私も刹那と模擬戦したくなつ
ちゃつたんだ」

「ここに一代目バトルマニアが降臨した。しかも無自覚というタチが
悪い方のな（それならまだあいつのほうがよかつた）」 b y 作者

「刹那君はどう？ 一回連続の模擬戦だけ…」

「構わない。それに少し試したいこともある」

「試したいこと？」

なのはもフロイトも疑問に思つが、わからない以上模擬戦で見るしかない

刹那は頭の中で色々と考えていた

（たしかにエクシアは俺のガンダムだが、武装は接近戦が主体だ。自信はあるが、それ以外も磨いておく必要がある。接近戦も砲狙撃戦もものになくてはこの先勝てない。少なくともダブルオーさえあれば…）

ダブルオーになればそういうこともだいぶ生かされてくる狙撃もだいぶできるようになつてているが、まだあの二人には遠く及ばない

今のうちに鍛えておく必要があると刹那は考えたのだ

「それじゃあ、すぐに始める?」

「私はそれでいいよ。体も温まつてるし」

「俺も構わない。行くぞ、クアンタ」

「了解にゃのだ〜！」

「クアンタ、セットアップ！」

そして刹那は青と白のスマートな装甲を身に付けて、エクシアとなつた

右手にはGNソード改が装備され、今回左手にはGNシールドは装備されていない

「クアンタ、GNブレイド」

「GNブレイド、セットアップ！」

そして刹那の両手に大小二本の実体剣が握られる
ガンダムエクシアのセブンソードの内の一本『GNシニアードブレイド』『GNロングブレイド』

「じゃあ、始めよっか。一応制限時間も付けておくね。時間は5分
間」

なのはの説明が一人の耳に入つてくる

「どちらかが戦闘不能になるかギブアップした時点で終了だよ。二人とも準備はいいかな？」

「うん。いいよなのは」

「問題ない」

フェイトはインテリジェントデバイス『バルティッシュ』を構える
刹那はGNブレイドを前で構え、GN粒子の散布を開始する

「それじゃあ、模擬戦、開始！！」

「ハアアアアアツー！」

「なつー？」

開始と同時にフェイトが斧の形態をしたバルティッシュを振りかぶ

つて刹那に向かつてくる
しかもクロノより速いため刹那は少し反応がおくれたが、GNブレ
イドを交差させて受け止める

「！」のやうに「！…！」

「ぐ…！」

GNブレイドを切り払つてフェイドを後退させる

「フォトンランサー…ファイアッ！」

黄色いスフィアが刹那に向かつてくるが、

「！」の程度つ！

それを難なく避ける刹那。これよりはファングの方が断然速かつた

「でやああああつ！…！」

「バルティッシュ！」

斧から黄色い刃の鎌に形態が変化して、GNショートブレイドを防
御するが、

「まだだ！」

「えつ！？」

ロングブレイドでバルティッシュを切り上げて、無防備にさせる

「ハアツ！」

「キヤアアアアアツー！」

非殺傷設定のGNロングブレイドをフェイトの体に切りつけ、フェイトは後ろに吹っ飛び

瞬時に態勢を整えたフェイトが刹那の視界から消えた

「一ちいっ！」

「避けた！？」

高速でフェイトは後ろに移動してサイスフォームのバルディッシュユウを刹那に振るが、それを察知した刹那はそれを体を捻つて回避する体の捻りを利用してGNブレイドをフェイトに振るう

「さすが刹那だね」

だが、フェイトはそれを障壁で受け止めて微笑みながら刹那を見る

「ああ。だが、お前のスピードは俺以上だ」

そう言つ刹那もほんの若干微笑みながらフェイトと相対する
障壁とGNブレイドがぶつかり火花が散つてゐる

『あと、3分だよー！』

なのはから残り時間が告げられる

そして二人は一旦離れて少し荒くなつた呼吸を整える

フェイトの黒い服には一部切れているところがあった。GNブレイドで切られたあと

「バルディッシュ、カートリッジロード

そして再び鎌の形態になり、フェイトはそれを振りかぶる

「ハーケンセイバー！」

そしてそれを振った。すると、黄色い刃が刹那に向かってきた

「（飛行制御頼むぞー！）」

「（つよ～かい）」

GN粒子を放出して空に飛ぶ刹那。フェイトが放った攻撃はそのまま刹那のいたところを通り過ぎる

「つー」

横を見てみると、そこにはフェイトがバルディッシュを構えて、こちらに攻撃をしようとしていた

『ハーケンスラッシュ』

フェイトは上からバルディッシュを振り下ろすが、

「えつー！？」

刹那はそれを横に少し動いて躲した

フュイトはそれを予測していなかつたのか、無防備になつてしまつ

「終わりだ」

GNブレイドをフュイトの首元に突きつける刹那

「うう～……負けた……」

フュイトが負けを認めて、刹那はGNブレイドを首元から離して腰にマウントする

刹那は勝つても別になんとも思つていなこようだが、フュイトに至つては結構悔しそうにしていた

「すう～～。フュイトちゃんにも勝つちやつたよ」

なのはも親友が負けて驚いていた

「次はどうすればいい？」

刹那がなのはに聞く

「今日は射撃だけしようか。模擬戦で疲れているだろうしね」

「了解」

的がいくつも現れ、刹那はGNソード改をライフルモードにする

「狙い撃つーー！」

銃口からピンク色のビームが的を撃ち抜き、刹那はすぐに目標を切

り替える

どんどん撃ち抜いていき、すぐに終了した

「す、」「……誘導なしでほとんど一撃…」

「私でもさすがに無理があるよ…」

なのはとフロイトは刹那の射撃センスに度肝を抜かれた
だが、これは刹那が命懸けの戦いで身に付けた技術であり、進化し
た者の力である

そして訓練は終了して、普通だったら疲れて倒れてもおかしくない
はずなのに刹那はケロッとしていた
少しだけ汗をかいているだけで、特に疲れているような感じはしな
かつた

「刹那の体力ってすごいんだね…」

「うん。一応この量だったら倒れてもおかしくないの」

刹那の体力は化け物かと思った二人

「今日はこれで終わりか?」

と、聞く刹那

「まだあるの!?」

「マスター、そろそろやめたほうがいいと思つこや。模擬戦の疲れ
もあるんだよ?」

「それにもう夜だから、帰る？」

「ああ。 もうこえは気になっていたんだが、フュイトー

「うん~どうしたの刹那？」

「お前の父前なんだが…」

「…うん。 私ね子供の頃にね親に捨てられて、その時に私を養子にしてくれたのがクロノのお母さんなんだ」

「…すまない。 いらっしゃった」

「…うん。 捨てられても私は今まであの人のことお母さんだつて思つてゐるから」

「フュイトーちゃん…」

フュイトの心情を察したのは

刹那もフュイトの心情が手に取るようにならかっていた。 イノベイタの力でフュイトの心が自分の中に流れ込んでくるのが感じられる悲しみなどがフュイトの中に渦巻いている。 もう感じた刹那だった

「もうこえは刹那君の両親は？」

「…（言つていいのか？ いや、下手に気を遣わせるわけにはいかない。 それに彼女たちにはいずれ話すことになる）」

刹那はそう思つて、口を開く

「俺の両親は中東で暮らしている。今はわからないが……」

「へえー、刹那の両親に会つてみたいな

刹那の嘘を信じているフロイト

なのはも嘘だと分かつてないよつだ。クアンタはそれを理解しているようだが……

「……そろそろ帰ろ。クアンタも眠たいだろ?」

「うそ。ねみゅー……」

皿をひきつけて眠たい」とを主張する

「やつだね。帰ろつか。フロイトちやんも家におりでよ」

「いいの?」

「気にしないで。一緒に食べよー?」

「うそ、うそ」

そして刹那たちはなのはの家に帰つていった

刹那の訓練 前編（後書き）

前編はフェイトとの模擬戦

後編はどうなるかな？ひたすら訓練か？

あと一つ言つておきたい

フェイトのソニックフォームは破けたらエロいぜー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2223ba/>

魔法少女リリカルなのは 革新者と魔法少女

2012年1月8日19時52分発行